

バルザック『谷間の百合』に現われた 貴族の世代差の問題

井 上 堯 裕

一昨年（昭和四十五年）非常勤講師として始めて本学で西洋近代史演習を担当することになったとき、私はバルザック、ユーゴー、スタンダルなどの小説を通して十九世紀前半のフランス社会を検討することを思いついた。ややもすれば教科書の概論の解説か机上の空論に終りかねない外国史の演習にたいし、小説であれ一つの史料から具体的に歴史に接近することは、有意義な試みであろうというのが当初の気持ちであった。その試みが、参加した学生諸君にとって実際にどのような意味をもったかは別に、私自身は自分の研究課題との関連で次の二つのことを意図していた。第一は小説を通して当時のフランス社会のはらむ問題を探り、研究仮説を構成することであり、第二はその時代の具体的雰囲気⁽¹⁾にふれることである。第二の点については説明は要らないであろうが、第一の点については若干説明を加えておきたいと思う。

戦後、フランスにおける社会史研究は、飛躍的な発展を示めした⁽²⁾。戦前の伝統的フランス史学は政治史を中心としており、アンシャン・レジームの土地制度史や価格史などの一部の領域やマルク・ブロック、リュシアン・フェーヴルら『アナル』派の業績を除けば、社会経済史研究は乏しく、社会史とはむしろ通俗的な風俗史の領域に近かった。そこでは社会とはとりわけ「上流社会」であり、その生活、風俗、意見などを、回想録や書簡集などの断片的な記述

を素材に描いていた。だが戦後、経済史の分野で確立された統計的方法が、社会史の経済史と近接する領域にも適用されるに至って、社会史は様相を一変した。社会史は全体社会の構造——社会を構成する全ての集団（階級）の個別的構成と、それら集団（階級）の相互関係——とその歴史的変遷の解明を目標とし、そのために人口調査記録、土地台帳、租税台帳を始め、裁判記録や公証人文書、さらには私企業の文書や家計簿に至るまで利用しうる限りの資料を統計的方法により処理しようとする。こうして社会史は歴史研究の「先進分野」となり、統計的分析の方法は次第にその適用分野を広げ、今やほとんど流行の観さえある。一九六〇年頃から、現在第一線にある研究者たちの大規模な博士論文があいついで刊行されるが、その背景には毎年おびただしい量のモノグラフィーがさまざまな資格論文として生まれている。

しかし、数量的社会史の発達は、書簡、自伝などの「質的」な史料を無意味とするものではない。計量的・統計的方法はあくまでも実証の一つの手段——もっとも確実な手段ではあるが——に過ぎない。今日の社会史の隆勢を導いた最大の歴史家の一人であるラブルース自身がそのことを明確に論じている。⁽³⁾方法の多様性の認識は「歴史哲学」を排し史実に則った実証を重んじるフランス史学の伝統に結び付く。とりわけ、これらの同時代人の残した記録や証言は、問題状況を把握し仮説を設定するためには依然重要な情報源である。同時代人の意識を知ることとは、われわれの立てる問題が時代錯誤に陥入らないためにも必要だとドーメール(Daumard, Adeline)女史は講義で述べていた。私がバルザックらの小説に求めようとするのも、何よりも当時の社会にたいする作家の証言であり問題提起なのである。

なお、演習において実際に取り扱うことのできたのはバルザックの作品のみで、次の四編であった。(一)『谷間の百合』(一八三五年発表。一八一四年王制復古直後のトクール近郊の農村を舞台としている。主要登場人物は貴族。)(二)『ウージェニー・グランデ』(一八三三年発表。一八一九年から一八三三年にかけてのロワール河畔の小都市ソーミュールを舞台とし、主要

登場人物はこの町のブルジョワ。(三)『ゴリオ爺さん』（一八三五年発表。一八一九年から一八二〇年にかけてのバリの裏街。主要登場人物は隠退したブルジョワのゴリオを中心に貴族と庶民に及ぶ。）(四)『従妹ベット』（一八四六年発表。一八三八年から一八四六年にかけてのバ리를舞台とし、主要登場人物は帝制貴族とブルジョワ）

*

バルザックの小説の史料的价值については多くの歴史家がその重要性を指摘しており、また、それが当時の社会の実態を正しく伝えているかを検討した研究も少なくない。(五) 実際、バルザック自身、自分の作品の写実的性格を各所で強調している。(六) だが、バルザックの作品はあくまでも小説であって、世態風俗のルポルタージュではない。また、風俗描写を目的とした単なる風俗小説でもない。各々の作品があるテーマをもっていて、しかもそのテーマは、多くきわめて古典的な文学上のテーマであり、例を挙げれば、『谷間の百合』は青年への愛と夫への貞節の葛藤に苦しむ人妻の悲劇という古今の恋愛小説にもっともありふれたテーマを扱っており、また、『ゴリオ爺さん』の悲劇はリア王の悲劇であるし、『ウジェニー・グラランデ』の父親は、モリエールの『守銭奴』の現代版である。この点は、バルザックの作品の文学的理解にとってもっとも必要な、バルザックの二面性——神秘思想につかれた幻視者としての一面と写実主義的作家としての一面——の問題と深く関わっており、ここでは深く立ち入る用意はないが、さしあたり、バルザックにとっては、まず、テーマ、ある思念につかれた人間のドラマがあり、時代的、社会的背景は、それを生きた人間として具体的に表現するための舞台装置であることを認めておこう。

したがって、バルザックの表現には、当然、誇張が伴い、あるいは異常な状況が設定される。それは、われわれが、バルザックを通して歴史の実態を探ろうとするのであれば、つねに念頭におき注意すべき点であろう。だが、それは必ずしも欠点とは言えない。むしろある社会集団に典型的な情念を描き出しているという利点がある。ことに、

わたくしの課題は、『人間喜劇』を通して当時の社会の実態を把握することよりも、問題状況を探ることにあるから、この利点は大きい。⁽⁷⁾

*

舞台と登場人物 『谷間の百合』は、小説としては、先に述べたように人妻と大人になったばかりの若者の恋というありふれた題材を扱っている。⁽⁸⁾ 問題は、この題材を扱うのにどのような舞台と登場人物が設定されているかである。時は一八一四年、ナポレオンの没落直後に始まり、場所は、バルザックの生まれたトゥール（Tours）からほど遠からぬアンドル（Indre）河畔のクロシュグールドという架空の館である。主な登場人物は、この館の主で元亡命貴族のモルソフ伯爵、その妻アンリエット、アンリエットに恋する青年フェリックス・ド・ヴァンドネスの三人で、三人とも古い家柄の貴族とされている。モルソフ伯は一七六九年の生まれ、長い亡命生活に疲れ身心ともに病んでいる。その妻アンリエットは一七八六年の生まれ、亡命生活から帰国したモルソフと結婚し、二人の間には病弱な子供二人がある。フェリックス・ド・ヴァンドネスは一七九四年生まれ、偶然の機会からアンリエットを知り、クロシュグールドの館に出入りするようになる。物語は、もっぱら、アンリエットとフェリックスの心の葛藤のドラマを描き、『バルザック唯一の恋愛小説』（M・ブロン）というにふさわしく、他の作品に見られるような波瀾に充ちた複雑な展開はない。もちろん、この作品でも、バルザックは「場所と事物」を細かに描くことで、アンリエットの「美徳の不幸」を社会的環境の中に根付かせ、それに生きた具体的個性を与えている。「芸術家が芸術を愛するように」⁽⁹⁾ 愛しているというトゥレーヌの風景は、このドラマの背景としてふさわしく、アンドルの流れはドラマの進行のテンポを象徴しているかのごとくである。さらに日常生活の細部がある。その中にはモルソフ家の領地経営のように、⁽¹⁰⁾ 歴史家としてのわれわれの興味をひく記述も少くない。しかし、ここでは細部に立ち入ることはやめ、この作品に現われ

ている当時のフランス社会のもっとも重要な問題の一つ、革命によって貴族の蒙った世代的変化に焦点を合わせることにしたい。

貴族の地位の変化　　いうまでもなく、貴族は革命により深刻な打撃を蒙った。革命の自由、平等の原則は貴族の社会的特権を廃止した。かつて宮廷貴族の得ていた文武の高級官職や高位聖職の独占、国王や王妃の下賜する恩恵的年金は今やなく、「封建制の廃止」によりさまざまな領主貢租は消滅し、農民に対する支配力は失われた。さらに亡命した貴族はその財産を没収され、売却された。しかし、全ての貴族が等しく打撃を蒙ったわけではない。例えば、「封建制の廃止」の経済的影響は領地収入中に封建的貢租の占める割合によりはなはだしく異ったはずである。また、亡命貴族のかなりが、財産の国有化、売却をさまざまな手段でまぬがれた。他ならぬモルソフ伯爵がそうであって、小作人が自分の土地と見せかけて競売から守ったのである。⁽¹¹⁾

王制復古は、たしかに貴族の地位を復活するが、それは単なる名譽的称号にすぎず、何の特権も与えるものではない。王制復古は革命以前の政治社会体制の完全な復活ではない。むしろ革命の行った基本的な変革はそのまま維持される。したがって王制復古の時代が地主貴族の支配の時代であるといっても、この支配は革命後の新しい社会的政治的条件の上で行われるわけで、貴族もこの条件に適應し変化する必要があった。ところが、この適應を行えない貴族がいる。その典型的な姿がモルソフ伯爵である。

旧時代の貴族、モルソフ　小説の構成の上では、モルソフはその役割からして、なかば気の狂った心身ともに破綻した人間、子供のようにわがままで頑迷な暴君として、あまり好意的に書かれているとは言えない。しかし、これも一つの人間像であって、たとえばモリエールの『人間嫌い』のアルセストがただちに想起されるであろう。それは過去のものとなってしまった価値にあくまで執着し、現実を受け容れようとしなない人間、自分の信じていたものへの忠

誠をつらぬきとおし、それに反する現実に妥協することを潔しとしない人間である。その時代遅れの振舞いは人々の嘲笑をかい、現実を理解できぬ愚かさは軽蔑を招くかも知れないが、見方を変えれば彼は信念の人、悲劇の主人公でもある。モルソフにもそういった人間の悲劇性を読みとることができようであらう。

彼は十年の辛苦にみちた亡命生活と、帰国後、さらに十年の貧しい隠棲の生活を、古い貴族の国王への忠誠と武人としての誇りを支えとして耐えてきたものの、精根尽き果て、かつては信念であったものが、もはや老人の頑迷、半狂人の執念にすぎなくなってしまった、いわば旧貴族の亡霊である。彼はアンシャン・レジームの「剣の貴族」の伝統的な価値に固執する。その中心にあるのは家門という「因襲的な価値」である。ルイ十一世の時代（十五世紀中期）以来の名家の当主である彼は、「十字軍時代からの紋章のある零落した一家の次男」フェリックスを、その家名の古さの故に厚遇する。また、かつてコンデ親王の率いる亡命貴族軍の中で勇猛をもって知られた彼は、戦士としての資質を重んじる。ナポレオンを憎むことはなほだしく、「呪いの言葉を吐き続け」てやまぬその憎悪にもかかわらず、彼は武将としてのナポレオンの豪胆とその戦術を賞讃する。さらに、彼の内にはまだ騎士的な誠実さ、たゆむことのない信念、剛直さや勇猛心といった「貴族的資質の名残り」がある。

だが、彼は「人々も事物もすっかり成長してしまった」現在の社会では、当然生まれにより得られたはずの権力を奪われている。彼は自から農耕にたずさわる一小地主としての扱いしか受けない。こうして「権利の上では人の上に立ち、事実では人の下にあることを知っている」彼は、ひたすらにこの理不尽な現実を拒否しようとする。そこで、彼は「幾何学的明瞭さでわかっているような事実さえ全然知らず」、「教育ある連中を毛嫌いし、卓越した人間などというものは認めず」、「進歩というものを頭から馬鹿にする」^①。要するに革命以来の新しい価値を一際拒み、現実を見ることさえやめて、おのれの殻の中にとじこもろうとする。妻アンリエットに対する暴君ぶりが、この権力を奪われ

た権力者のいやされぬ自尊心の傷に由来していることは言うまでもない。⁽¹⁵⁾

バルザックがモルソフをもって元亡命貴族の典型を描こうとしたことは、彼自身の言葉によっても明らかである。⁽¹⁶⁾ 彼が、それを余りに頭迷偏狹で、時代の変化に無知盲目な人物として描いたこと、とりわけ、王党派の新聞『クオティディエンヌ』の名を明示した次の一節——「クオティディエンヌ紙の永久に獲得された読者……信仰あつく、おのれの大義に情熱を燃やし、自己の政治的反感をあからさまに示めし、自分の党派に自身で貢献する能力はないのに、それを破滅させることはしかねない、そして、フランスで起きている事柄に何らの知識もたぬ人間……」⁽¹⁷⁾——は、王党派の攻撃を招くこととなる。⁽¹⁸⁾ バルザックの描写が、王党派貴族の少くとも一面を、よくとらえていることの証拠というべきであろう。

再生した貴族、アンリエット この自分から過去に埋もれ、早くも老いさらばえてしまったモルソフに対し、その妻アンリエットは古い貴族の価値を守りながら、病んだ夫と病弱な子供のために、新しい現実の中で生きようと努力している。

彼女の社会観は全く貴族的と言ってよいであろう。彼女は、まず、革命の主張した自由や平等の原理に立つ社会観を否定する。「誤って規定された自由の原則などは、人民の幸福を作り出すのにいかに無力であることか。」そして、「社会は階層秩序なしには存在しない。」⁽¹⁹⁾ また、彼女は「この身分的社会秩序に従順に従うことを求めている点で、きわめて保守的である。アンリエットが、社会に出ようとするフェリックスにあてて書いた長い手紙は、青年に処世の術を説いたものとして有名であるが、その中で、彼女は「たとえそれがご自分の利益のためによからうと悪からうと、決してとやかくおっしゃらず、万事につけて一般の法に服従なさらなくてはなりません。」⁽²⁰⁾ と言っている。だが、この現存の社会秩序への無条件の服従は、自己の幸福を「至上の法」として他人の犠牲は一際かえりみないという利

己主義に対して主張されている。この「個人的幸福の理論」に対して、アンリエットは、社会は「義務の理論」によつてのみ説明されると言う。すなわち、全ての人間は、各々、社会から受ける利益に応じて義務を負っている。したがって、利益を受けることの多い身分の高い者ほど、義務も大きいということになる。⁽²¹⁾こうして、貴族の誇りに義務の觀念が結び付けられる。それは「Noblesse oblige」(「貴族たることは義務を生む」)という伝統的な貴族精神の再確認であり、アンシャン・レジームの、社会の寄生者になりはてた退廃した貴族をこえて、まだ独立心に充ち、何よりも名譽を重んじていた古い貴族の伝統を再興するものである。

アンリエットは、また、精神において誇り高いだけではなく、実生活においても有能な地主である。彼女は無能力な夫に代つて、事實上、領地経営をとりしきり、出費を惜む夫の反対を説き伏せ、慣習的農法に固執する農民の頑迷に打ち勝つて、新しい輪作法を採用するなど、粘り強く農業経営の革新を推し進める。だが、他面、彼女は厳格な地主でもある。彼女は小作人の「不正」を許さず、小作料などの収益は確実に取り立てる措置をとる点でもぬかりない。⁽²²⁾

こうした貴族としての偏見や地主としての敵しさにもかかわらず、彼女は村人たちから深い尊敬を受けている。それは、「キリスト教徒として、母親として、城主の奥方として、」彼女の行った慈善行為のためであらうか。彼女は「貧しい人々を助けるために、貯えが不足な時には、化粧代を節約した。」⁽²³⁾ここにも、また、宗教的隣人愛や人間的感情とともに、貴族としての誇りと義務感が見出される。何れにせよ、彼女の小作人の一人は次のように言っている。

「……あの方がこの土地を離れなるときには、マリア様だって涙をこぼされるだろうし、わしらも泣きまさ。あの方は、自分の取り分は承知なさっている。だが、わしらの苦勞も知っていないさるし、それを心にかけて下さっている。」⁽²⁴⁾そして、彼女の葬列には、この谷間の住民全てが連らなつた。⁽²⁵⁾

十八世紀の退廃した貴族に代つて、このアンリエットは、再生した貴族、精神的にも経済的にも力を取り戻した貴

族を代表している。少数とはいえ、これらの貴族は農村に復帰し、そこに根をおろし、経営の革新により農業近代化をリードする一方、一種の家父長的な權威を農民の間に再建する。こうした貴族の農村支配は、とりわけ西部を中心とする後進地域に著しく、七月革命以後もなお長く地方的勢力として残存することとなる。

脱貴族的貴族、フェリックス フェリックスは、今一つ別の貴族の典型を示めしている。だが、「貴族の」といふべきであろうか。フェリックスには、ほとんど、貴族としての意識がないのである。彼は自分の家系について、ほとんど何も知らない、彼の父は、亡命こそしていないが、王党派の陰謀で重要な役割を演じた人物であるが、それについてすら詳しくは知っていない。そして、これらの過去を知らないのみならず、それにさしたる興味も示めさない⁽²⁷⁾。過去のみならず、現在に対しても、モルソフが青春のすべてを捧げて待ち望んでいた王制復古に対してさえ、彼は何の関心も示めさない。この大変動は自分とは無関係に起きていた、自分はそれを知らず、また、理解していなかったと、彼は何度も記している。⁽²⁸⁾

それにもかかわらず、フェリックスは、王位に復したルイ十八世に仕え、まもなくエルバ島からナポレオンが戻り、いわゆる「百日天下」がくると、ベルギーに亡命した王家に従い、若冠二十一歳で国王密使の役をおび、ナポレオン支配下のバリ、ヴァンデーに潜行し、その任務を見事に果す。そして、その功績で、再度復位したルイ十八世から、顧問会議調査官に登用される。この王家への忠勤とその結果としての異常な若さでの出世は、貴族としての自覚に目覚めたことに由来するのであるうか。「身も心も挙げてブルボン王家に帰依している」「若さは純真な崇敬の念、打算のない忠実さをもっている」⁽²⁹⁾と書かれてはいるものの、それは完全に計算づくの行動ではないにしろ、また、自己の思想や信条に発した行動でもない。彼を国王への献身に駆り立てた動機は、アンリエットとの最初の出会いとなつたブルボン王家帰国の歓迎舞踏会⁽³⁰⁾のとき、王家の人々を見て感じた権力や榮譽への憧れ⁽³¹⁾、そして、幼い頃から差別

されて扱われてきたことからする兄に対する激しい競争心にあり、こうした個人的な野心、出世欲が、アンリエットの賢明な指導によって、彼を成功に導くのである。

貴族の二つの世代 こうして「谷間の百合」の三人の主要登場人物は、この時代の貴族の三つのタイプを代表していると言えるであろう。とりわけ、モルソフとフェリックスを対照するとき、革命によって貴族の蒙った精神的変化をはっきりと見るができる。モルソフにとって重要なのは、原則、主義主張であり、名誉や武勇といった伝統的な貴族に固有の価値である。それに対し、フェリックスは何の主義主張も持ち合わせていない。彼も名誉を求め権力を指向するが、それらは全く個人的な価値で、アンリエットのもとに在ることの幸福と同列に扱われうるもので、また、そう扱うことに彼は何の違和感も感じない。この二人の対照は、また、ルイ十八世の採った政策に対する態度にも現われている。ブルボン王家の復位に、当然のこととしてアンシャン・レジームの完全な復活を期待したモルソフは、ルイ十八世の「自由主義的」政策を理解することができない。⁽²⁹⁾ それに対し、ルイ十八世の個人的な信頼を得、その「ひそかな弟子」として、その治世の続く限り、「政治の枢機に参与」していたフェリックスは、王が死に、反動的なシャルル十世が王位に着くと、外交界に身を転じる。⁽³⁰⁾

モルソフとフェリックスの対照は、貴族の古い世代と新しい世代の対照である。そして、この世代の対照には、絶対主義の時代から革命、帝制を経て、王制復古に至る四分の一世紀余の激しい変動を、人生のどの時期に経験したかが決定的に重要な意味をもっているように思われる。⁽³¹⁾ しかも、この世代差は、バルザックの小説の場合、貴族に限らず他の社会層にも共通して存在するように思われるのである。

他の作品の場合 先に述べたように、バルザックの小説にはあるテーマがあり、バルザックはそのテーマを演じる情念のかたまりのように誇張された人物を何人か作り出している。『谷間の百合』のモルソフにも多少そうした面が

見られるのだが、たとえば、『ウジェニー・グランデ』の父親グランデ、『ゴリオ爺さん』のゴリオ、『従妹ベット』のユロは、それぞれ、金、娘への愛、女に、それこれ骨の髄までとりつかれ、死に至るまでそれを追い求め止むことがない。ところが、これらのいささかグロテスクな人物は、社会層は全く異なるのに、すべて革命前に青年期に達している。（ゴリオとグランデは共に一七五〇年生まれ、三十九才で革命を迎え、ユロはそれにくらべると若く、一七七一年生まれ、それでも、革命の始まった時には十八才になっている。）それに対して、フェリックスと同じ世代——というのは、とりまなおさず、バルザック自身と同じ世代である——で、革命の後期に生まれ、帝制時代に成長した世代の登場人物にも、奇妙に一致した性格が見られるように思われる。（『ウジェニー・グランデ』からはウジェニーの従兄シャルル（一七九七年生まれ、『ゴリオ爺さん』からはラスチニヤック（一七九八年生まれ）をその例として挙げる事ができる。なお、生年が明示されていないが、『従妹ベット』のユロの長男ヴィクトランも、おそらくこの例に加えるであろう。）彼らは狂気からはほど遠く、強烈な個性の持ち主ではない。もちろん、彼らも、富や権力や榮達を追求する。だが、それは革命前の世代に属すあの巨人たちに見られる底抜けの耽溺——そこにこそ、むしろ人間臭さがただよっている——ではない。彼らの致富欲、権力欲、出世欲には、シニズムがただよい、まつわっている。彼らは自己の信念や情念にしたがつて、運命と闘う意志的、熱狂的人間ではない。彼らは運命にもあそばされるか、さもなければ、むしろ、運命を冷たく計算づくで利用しようとする。運命を体制と読み替えるならば、彼らはその限りで体制的である。彼らの価値体系の中心は、あくまでも自己であり、体制が自分の利益の実現に役立つ限り、体制を支持し利用する。だが、この利己的な人間も、彼らが、すでに革命と反革命の一サイクルを経た社会に生まれ、さらにいまだ変転絶え間ない時代に育ったことを考えれば理解しうるであろう。また、歴史的に概観するならば、十八世紀の啓蒙思想以来の理念や原則で争った時代は過ぎ、そうした信条や原理やイデオロギーを捨てて、あるがままの現実を見る必要が生じてい

たとも言えるであらう。

七月革命と世代差 通常、王制復古期は地主貴族の支配、七月王制は銀行家を中心とする大ブルジョワジーの支配と説明されるが、この支配階級の交替とともに、それと同等か、あるいはそれ以上に、世代の交替が重要な意味をもっていたのではないかというのが、以上の考察から導き出した仮説である。その点からすると制限選挙制の選挙資格の内、納税額と共に年令制限が重要な意味をもってくる。王制復古期には、選挙権は三十歳以上で直接税を年額三〇〇フラン以上納税している男子に与えられ、被選挙権は、年令四十歳以上、納税額一〇〇〇フラン以上ときわめて高年令、多額納税者に限定されていた。（七月革命後、選挙権は年令二十五歳以上、納税額二〇〇フラン以上、被選挙権は年令三十歳以上、納税額五〇〇フラン以上と、それぞれ、引き下げられる。）この被選挙権の年令制限四十歳以上という規定は、現実に適用于みると、王制復古期のとくに前半は、モルソフと同年以上の革命前の世代に代議院が独占されていたことを意味し、反対に、フェリックスのような若い、権力欲に充ちた革命後の世代は、いかに有能であれ、一八三〇年に至っても、まだ、公的な政治参加からは排除されていたことになる。

新・旧両世代間に深刻な意識の差が生じているにもかかわらず、政治権力は旧世代により独占され、とうに経済的にも知的にも実力を蓄えた新世代は政治からのみ除外され続けている。このことから生じる不満の鬱積が七月革命の主要な原因の一つであったと考えられる。

貴族的価値の変化 今一つ、『谷間の百合』を通して指摘しておきたいのは、貴族の価値の変化の問題である。一方で、フェリックスのように、伝統的な貴族の価値に無関心で、むしろ、同世代の若者に共通した個人主義的、実利的、物質主義的な価値観をもつ傾向——ブルジョワ的価値の貴族への浸透——があるとすれば、他方では、そういう個人的幸福、個人的栄誉、あるいは個人的虚栄の目標として、貴族の地位や貴族的な生活は、いささかも力を失っ

たわけではない。むしろ、それが「生まれ」と切り離され、生まればかりでなく、才能によって誰もが得られるものとなったことにより、この貴族的価値は生き延びたと言えるであろう。それは財産を築き上げたブルジョワにとっての最後の魅惑である。ブルジョワが、貴族の地位、生活に憧れ、それを模倣し、ついには貴族となる例は、『谷間の百合』では、傍役の一人シエッセルに現われているが、バルザックの他の作品にも多い。貴族の価値の変化、ブルジョワ的価値との融合の問題は、なお、バルザックの他の作品、とりわけ、パリの上流社会を扱った諸作品の分析によって、さらに検討されるべき点であって、ここでは単に指摘にとどめたい。

注

(1) 第一点と関連してフランスの研究者が幼い頃からこれらの小説と親しむことにより、ほとんど無自覚の内に、したがって自明のものとして持っているはずの、この時代についてのイメージを共有することがある。われわれ外国史の研究者にとって、その国の人々にとってもっともありふれたことが、もっともわかりにくい。

(2) フランスにおける社会史(histoire sociale)の現状については、デュブー著、井上幸治監訳『フランス社会史』東洋経済新報社、昭和四三年、のとくに日本語版への序文を参照。なお、主なフランス語文献としては次のものがある。

Comité français des Sciences historiques, La Recherche historique en France, de 1940 à 1965. Paris, 1965. L'Histoire Sociale—Sources et Méthodes—Colloque de l'Ecole Normale Supérieure de Saint-Cloud (15—16 mai 1965). Paris, 1967. Histoire économique et sociale de la France, publiée sous la direction de Fernand Braudel et Ernest Labrousse, tome 2. Paris, 1970.

(3) 前出 Histoire économique et sociale……p. XIII.

(4) 邦訳のあるものに限っても、デュビー・マンドルー『フランス文化史』第三卷五四ページ。ロム『権力の座について大ブルジョワジー』四九二ページ。

(5) 私の直接参照した文献のみを挙げる。

Louis, Paul, Les Types sociaux chez Balzac et Zola, Paris, s.d. Blanchard, Marc, La Campagne et ses habitants dans l'œuvre de Honoré de Balzac, Paris, 1931. Georges Pradairé, Balzac Historien-la Société de la Restauration, Paris, 1955. Donnard, Jean-Hervé, Balzac—Les Réalités économiques et sociales dans la Comédie Humaine, Paris, 1961. またこの問題と不可分の関係にあるバルザックの政治社会観についてはその形成と変遷を分析した次の論文がある。Guyon, Bernard, La Pensée politique et sociale de Balzac, 2e éd. Paris, 1969. わが国においても、バルザック研究家である故安土正夫氏が概括的な論文を書かれている。「バルザックの「人間喜劇」に現われた近代社会」（『歴史学研究』一七四号一九五八年八月）。また本田喜代治氏の「バルザックの世界と人間」（『バルザックとゾラ——本田喜代治フランス社会思想研究第三巻』所収）は、時代的背景との関係で論ぜられた小編ながら示唆的な作品論である。

(6) 例を挙げれば、「フランスの社会が歴史家なのであって、私はただその秘書になればいいわけである。」「（人間喜劇）序、中島健蔵訳、筑摩書房版世界文学大系、第三巻、三八四ページ）」「風俗の歴史家はまず最初に、事実の歴史家を支配する法則よりもいっそう苛酷な法則にしたがうものである。風俗の歴史家はあらゆる事柄を、さも真実らしく見せねばならない。真実をすらすら、事実、ありそうに見せねばならない。しかるに、本来の歴史の領域においては、不可能な事も、それがたまたま起ったという理由によって正当づけられる。」「（農民、水野亮訳、同前、第二四巻、一〇一ページ）

(7) Donnardらの詳細、綿密な研究が、きわめて有用でありながら、私の関心に完全には答えてくれないのは、この点と関連している。バルザックの作中人物が、現実とどのように正確に一致しているかを、当時の文献にもと付いて細々と検討したこれらの論文は、やはり文学研究者の仕事なのであろう。私にとってもっとも問題なのは、バルザックの記述の客観的忠実度それ自体ではなく、誇張や異常、現実のデフォルメをも含め、それにより、バルザックが当時の社会の何を問題とし、何を描こうとしているかである。

(8) 「谷間の百合」についての文学的評価と云えば、アランが引き合いに出されるのがつねのようであるが、私はアランの所説、とくに政治の役割云々については、同感できないものを感じる。それに対して、Le Club français du Livre版のマルセル・ブリオンの序文は、短いが、きわめて示唆的であった。アラン著、岩瀬孝、加藤宏共訳、バルザック論、冬樹社、昭和四三年。Marcel Brion, Préface au *Lys dans la Vallée*, dans l'Œuvre de Balzac, tome I, Le Club français du livre, 1966. なお、「谷間の百合」よりの引用については、もっとも入手しやすいと思われるガルニエ版と岩波文庫版のページ数を示めす

こととした。アラビア数字はガルニエ版の、上下と和数字は岩波文庫版の該当ページを示めす。また、訳文は、岩波文庫版の宮崎嶺雄氏の秀れた訳文によらせて頂いた部分が少なくない。Balzac, *Le Lys dans la vallée*, éd. par Moïse Le Yaouanc, Editions Garnier Freres, s.d. バルザック作、宮崎嶺雄訳、谷間のゆり、上・下、岩波文庫、昭和三五年（第二印刷、昭和四四年）

- (9) 30. 上・三十七。
- (10) 130. 上・一六三他。
- (11) 59. 上・七十一。
- (12) モルソフの亡命中、帰国後の生活とその人格については、59. 上・五九以下、57. 上・六九以下、69. 上・八三以下。
- (13) 165. 上・二二四。
- (14) 69. 上・八三。
- (15) 「伯爵の自尊心は、妻を傷つけても、自分の体面を守ろうとした」59. 上・八〇。
- (16) 「われわれの時代のもっとも威圧的な類型の一つである亡命貴族の巨大な姿」83. 上・一五二。また、「谷間の百合」を書き上げる直前、一八三六年五月一六日のハンスカ夫人への手紙で、彼は次のように言っている。「特に目立つ人物といえば、もちろんモルソフ氏です。その姿を描くのは全く難しいことでした。だが、それは今日完成しました。私は亡命貴族の彫像を建てたことになるでしょう。」324, note 1.
- (17) 50. 上・六〇。
- (18) Donnard 前掲書 p. 165~6.
- (19) 103. 上・一三十一。
- (20) 157. 上・二〇一。
- (21) 157. 上・二〇二以下。
- (22) 164. 上・二二二。
- (23) 89. 上・一一〇、130. 上・一六三以下、177. 上・二三三以下、など。
- (24) 313. 上・二三三。

- (25) 136. 上・一七六。
- (26) 312. 下・一三三。
- (27) 8. 上・五八。
- (28) 22. 上・二八、98. 上・一二四、106. 上・一三五、173. 上・二二七。
- (29) 171. 上・三四、183. 上・二四〇。
- (30) 同前。
- (31) 24. 上・三〇。
- (32) 193. 上・二五四。
- (33) 193. 上・二四〇、328. 下・一五八。なお、フェリックスは「人間喜劇」諸篇を結ぶ重要な再出人物の一人である。その後の生活はロットの「作中人物辞典」によれば、次の通りである。アンリエットの死後、彼はその職務からして、大きな政治力を持ち、また、社交界の寵児として、情事を重ねる。シャルル十世の治世の末期に、国王の不興を蒙り、貴族院に棚上げされるに至って、結婚を考え、古い法服貴族の一門、グランヴィル家の長女と結婚、公職から離れ、優雅な生活を送る。一八三〇年七月革命に際しては、革命の収拾工作に役かっている。
- (34) Fernand Lotte, *Dictionnaire biographique des personnages fictifs de la Comédie humaine*, Paris, (1952).
当然のことながら、教育が重要な役割を果たしているだろう。アンリエットはフェリックスの受けた中等教育に触れている。「あなたは、中学校（リセ）で革命の乳をお吸いになった、そして、あなたの政治思想にはその名残があることでしょう。」
103. 上・一三二。リセは、ナポレオンにより創設された国立の中等教育学校である。
- (35) フェリックスの幼年・少年期についての記述には、バルザック自身の自伝的要素が多いことはよく知られている。
- (36) 54. 上・六七。